

客観的指標の妥当性

—— 学力レベル, 作文経験の影響と, 文法力, 語彙力との関係 ——

平 野 絹 枝*

(平成5年4月30日受理)

要 旨

第一, 二言語習得の研究で言語発達を示す客観的指標として, T-unit は多くの研究者から活用されている。本稿では日本人大学生の英作文を分析して, 学生の総合的英語学力を示す客観的指標の妥当性が, 学力レベルや作文経験によって異なるかどうか, また客観的指標は文法力, 語彙力のいずれと相関が高いかどうかを検証する。

KEY WORDS

objective measures

客観的指標

error-free T-unit

誤りのない T-unit

mean T-unit length

T-unit 平均の長さ

writing experience

作文経験

overall language proficiency

総合的言語能力

1. はじめに

ESL (English as a second language)/EFL (English as a foreign language) 習得研究の分野では, 学習者の英語の発達の指標 (index of ESL/EFL development) を確立しようとする試みがある。T-unit¹⁾分析に基づいて, 総合的英語力を示す指標として, 客観的指標 (objective measure) がどの程度有効かについて検証がなされてきた (例えば, Larsen-Freeman & Strom, 1977; Larsen-Freeman, 1978, 1983; Harrington, 1986; 平野, 1990; Hirano, 1991a, 1991b; 平野, 1992, 1993)。実証的研究の結果から, ESL の総合的英語力を示すのに最も有効な指標として, 1) 統語的複雑度を示す「T-unit の平均の長さ」(T-unit 1 個当たりの平均語数), のほかに T-unit を修正した指標, すなわち, 2) 誤りのない T-unit (error-free T-unit, 以下 EFT と略す) を挙げることができよう。Larsen-Freeman & Strom (1977) は「EFT の総数」が第 2 言語としての英語の発達の指標として最も有力であることを指摘した。Larsen-Freeman (1978) は学習者の英語力のレベルを最も良く弁別する指標は, 「EFT の平均の長さ」(EFT 1 個当たりの平均語数) と「全 T-unit 内の EFT の割合」であることを見出し, 英語力が高くなるにつれて, 誤りのない T-unit の割合が高くなるとともに, その長さも長くなることを報告している。しかしこれらの指標がすべての場合にうまく学力を有意に弁別するとは限らない (Larsen-Freeman 1983) ことが指摘されており, 客観的指標は総合的英語力を測るひとつの (補助的) 目安として使用の方がよいかもしれない。

* 言語系教育講座

一方日本人 EFL 学習者において、大学生の場合、「EFT の平均の長さ」は ESL で期待されているほど有効であるとはいえないことがあり、むしろ「EFT 内の総語数」のほうが、EFT を用いた指標の中では最も有効な指標の一つであると言える（平野, 1990; Hirano, 1991a）。

最も有効な指標としての重要な条件にいろいろな要因の影響を受けないことが挙げられる。筆者はどのような場合に日本人 EFL 大学生の総合的英語学力を測る客観的指標の有効性が異なり、高まるかを一連の研究を通して検証し、要因の影響を検討してきた。幾つかの要因（読み手、談話の型、英作文の長さ、誤りの種類、日本語の干渉）が有効生（妥当性と弁別力）にどのような影響を及ぼすかについては、次の点が明らかになった。「英作文の総語数」と「T-unit の平均の長さ」の 2 つの指標だけは談話のタイプによってその有効性（弁別力）が影響を受けることが判明した（Hirano, 1991a）が、客観的指標の有効性は読み手の影響を受けなかった（Hirano, 1991b）。他の要因、例えば EFT の誤りの基準の違いや、英作文の長さの違いによって、EFT の有効性に差が見られる場合があった（平野, 1992）。また日本語の介入が客観的指標の有効性に影響を与えないとは言えなかった（平野, 1993）。

日本人 EFL 大学生の場合、上記の要因の他に、学力レベルや作文経験、英語学習経験が客観的指標の有効性に影響を与えるかどうかを調べることは大変興味深い。また客観的指標の有効性が総合的英語学力の他にその構成要素の文法力、語彙力とどのような関係があるかを調べることも意義深い。

本研究の目的は次の 3 点を明らかにすることである。客観的指標で日本人 EFL 大学生の総合的英語学力を測る場合、その指標の有効性（ここでは妥当性に焦点をあてる）が 1) 学力レベルによって違いがあるかどうか、2) 大学での作文経験によって違いが生じるかどうか、3) 客観的指標と文法力、語彙力のいずれとの相関が高いか、を検証することである。1) については、特に英語学力の下位グループでは指標が総合的英語力をはかるのに妥当な指標となりうるかどうか焦点をあて、2) では大学での英語専攻者と非英語専攻者を比較検討する。

2. 方 法

2.1 被験者

121名の日本人 EFL 大学生（アメリカ在住10ヶ月～1年の者2名を含む。海外在住1年以上の学生は海外在住経験の変数を考慮して除いた²⁾。121名中80名は平野（1991a）と同じ被験者である。内訳は国立大学一般英語受講非英語専攻者（1年生）69名。公立短期大学・国立大学英語専攻者52名（2年生45名、大学院生7名）。調査実施時（非英語専攻者は1年時5月～6月）、非英語専攻者は大学の英作文の授業を受講しておらず、一般教養英語の授業でも作文はほとんどなく、短い課題英作文を約2、3回書いた程度であった。英語専攻者は調査実施時まで、大学での専門的英作文の授業を9ヶ月以上受講していたか、受講経験を持っていた。

総合的英語学力を測定するために使用した標準英語力テスト、即ち CELT の Form A³⁾（文法テスト、語彙テスト、リスニングテストの3つから構成。各テスト100点満点、計300点満点。各テストの所要時間はそれぞれ45分、35分、35分。）の得点（換算点）に基づいて被験者を2群に分類した。CELT の平均点170.57点以下（各テストの平均点が56.86点以下）を下位群、170.57点以上を上位群とした。下位群の CELT 得点の範囲は102～170点で平均点は145.5点であった。

表1 CELTの平均値と標準偏差

level	n	得点範囲	Mean	SD
全体	121	102~259	170.57	32.87
下位群	62	102~170	145.50	19.14
上位群	59	171~259	196.92	21.82
非英語専攻	69	102~229	159.07	30.83
英語専攻	52	140~259	185.83	29.06

上位群のCELT得点範囲は171~259点で、平均点は196.92点であった。また非英語専攻者のCELT得点範囲は102~229点、平均点は159.07点であった。英語専攻者は140~259点で、平均点は185.83点であった。表1は被験者全体、下位群、上位群、非英語専攻者、英語専攻者のCELT得点の平均点とSDを示

す⁴⁾。

2.2 手順

まずCELTを実施して英語学力を測定した。次に英作文テストを課した(制限時間30分)。Larsen-Freeman (1978)と同じトピック(“Do you prefer to live in a large city or in a small town?”)を与えた。ただし本研究では被験者に、最初に“I prefer to live in a large city / small town.”から書き出し次にその理由を明確にあげて、主題を展開するように指示した。Perkins (1980)と同様、被験者にできるだけ多くの英文を書くことを指示した。辞書の使用は禁止した。なお被験者全員、本研究と同じトピックの作文は英語でも日本語でも以前書いたことがないことを、アンケートによって確認した。

2.3 分析方法

英語母語話者英語教員二人と筆者の三人がすべての英作文を別々にチェックして誤りの判定を行ない、疑問が残る場合はさらに他の英語母語話者にもコメントを求めた⁵⁾。また文として不完全なもの(fragment, maze)はT-unitの数の計算から除外した。単語数の計算方法はHirano (1991a)と同じである。EFTの分析はLarsen-Freeman (1978, 1983)のあいまい性のない方法を採用し、句読点(punctuation)、つづり(spelling)まで許容しない、すべての面で誤りのないことをEFTの条件にした。

使用した客観的指標は、(1)英作文の総語数、(2)T-unitの総数、(3)T-unitの平均の長さ(平均語数)(mean T-unit length=mean number of words per T-unit)、(4)節の平均の長さ(平均語数)、(5)T-unit内の節の平均数(clause/T-unit)、(6)従属節の割合(%) (全ての節の中で従属節の占める割合)、(7)EFT内の総語数(total number of words in EFT=全T-unit内にある総単語数)、(8)EFTの総数(total number of EFTs)、(9)EFTの平均の長さ(平均語数)(mean length of EFTs=mean number of words per EFT(即ち、EFT内の総語数をEFTの総数で割ったもの)、(10)全T-unit内のEFTの割合(%) (percentage of EFTs, 即ちEFTの総数をT-unitの総数で割ったものの%)。

指標の妥当性はピアソンの積率相関係数を使用した。

表2 客観的指標の平均値とSD

客観的指標	レベル	Mean (SD)	作文経験	Mean (SD)
英作文の総語数	下位群	150.19(41.93)	非英語専攻	157.96(50.28)
	上位群	185.71(65.11)	英語専攻	180.19(63.26)
	全体	167.51(57.30)		
T-unitの総数	下位群	15.00(4.52)	非英語専攻	14.68(4.40)
	上位群	16.07(5.47)	英語専攻	16.64(5.58)
	全体	15.52(5.03)		
T-unitの平均の長さ (平均語数)	下位群	10.06(1.75)	非英語専攻	10.78(1.95)
	上位群	11.64(2.00)	英語専攻	10.89(2.14)
	全体	10.83(2.04)		
節の平均の長さ (平均語数)	下位群	7.63(1.40)	非英語専攻	7.99(1.31)
	上位群	8.25(1.22)	英語専攻	7.87(1.40)
	全体	7.94(1.35)		
T-unit内の節の平均数	下位群	1.33(0.18)	非英語専攻	1.36(0.20)
	上位群	1.42(0.21)	英語専攻	1.39(0.21)
	全体	1.37(0.20)		
従属節の割合	下位群	23.47(10.40)	非英語専攻	24.87(10.94)
	上位群	28.01(10.09)	英語専攻	26.75(9.77)
	全体	25.68(10.50)		
EFT内の総語数	下位群	23.87(18.41)	非英語専攻	33.10(28.27)
	上位群	59.20(42.47)	英語専攻	51.71(43.80)
	全体	41.10(36.95)		
EFTの総数	下位群	2.86(2.04)	非英語専攻	3.49(2.66)
	上位群	5.78(3.87)	英語専攻	5.33(3.95)
	全体	4.28(3.40)		
EFTの平均の長さ (平均語数)	下位群	7.87(3.41)	非英語専攻	8.52(3.55)
	上位群	9.87(2.77)	英語専攻	9.29(2.79)
	全体	8.85(3.27)		
全 T-unit内の EFTの割合	下位群	19.16(13.02)	非英語専攻	23.32(15.54)
	上位群	34.82(16.18)	英語専攻	31.40(16.84)
	全体	26.79(16.60)		

3. 結果と考察

3.1 学力レベルの違い

表2は、客観的指標の平均値とSDを示す。表3が示すように、客観的指標とCELTの得点との相関は他のテスト(TOEFL, プレイメントテスト等)を外基準テストとして用いた先行研究の結果と同様、高くなかった。全体では、すべてCELTの得点と5%以下の危険率で有意な相関があった。被験者全体で、4以上の有意な相関係数を示したのは、「英作文の総語数」、「T-unitの平均の長さ」、「EFT内の総語数」、「EFTの総数」、「全T-unit内のEFTの割合」、

表3 客観的指標と CELT の相関と、相関の有意差検定（全体、下位群、上位群）

客観的指標	(a)全体	(b)下位群	(c)上位群	(b)と(c)の相関の 有意差検定 CR
英作文の総語数	.489***	.183	.562***	-2.412*
T-unit の総数	.217*	.002	.380**	-2.026*
T-unit の平均の長さ（平均語数）	.518***	.333**	.410**	-.477
節の平均の長さ（平均語数）	.306***	.076	.353**	-1.565
T-unit 内の節の平均数	.294**	.305*	.128	.997
従属節の割合	.322***	.337**	.172	.943
EFT 内の総語数	.620***	.381**	.511***	-.874
EFT の総数	.570***	.369**	.454***	-.552
EFT の平均の長さ（平均語数）	.397***	.240	.306*	-.381
全 T-unit 内の EFT の割合	.550***	.382**	.291*	.547

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表4 客観的指標と CELT の相関（下位20名、30名）

客観的指標	下位20名	下位30名
英作文の総語数	-.084	.001
T-unit の総数	-.125	-.179
T-unit の平均の長さ（平均語数）	.068	.401*
節の平均の長さ（平均語数）	.087	.152
T-unit 内の節の平均数	-.079	.235
従属節の割合	-.011	.260
EFT 内の総語数	.246	.230
EFT の総数	.333	.219
EFT の平均の長さ（平均語数）	-.167	-.012
全 T-unit 内の EFT の割合	.318	.320

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

であった。Larsen-Freeman (1978, 1983) が最も妥当性の高い指標として提唱している「EFT の平均の長さ」は有意であるが、.397の相関を示し、日本人 EFL 大学生の場合必ずしも妥当性の最も高い指標にはならなかった。また Hunt (1970) 他が L1 学習者の有効な指標として提唱している、「節の平均の長さ」、「T-unit 内の節の平均数」、「従属節の割合」は CELT の得点と有意であったが低い相関を示した。このことから「T-unit の平均の長さ」を除いて、誤りを無視した指標は日本人 EFL 大学生の英語学力を示す妥当な指標とは必ずしも言えないことがわかった。このことは先行研究（例、平野 1990）の結果を再確認するものであった。

表3で学生を2群にわけて下位群と上位群を比較した場合、「英作文の総語数」、「T-unit の総数」を除いた他の指標と CELT 得点の相関は両グループ間で有意差が検出されなかった。つまり8個の指標の妥当性については下位群と上位群間で有意な差が認められなかった。ただし「英作文の総語数」と「T-unit の総数」の妥当性は上位群の方が優位であった。この2つは流暢さ

を示す指標とされており、英語学力の低い下位群ではこの2つの指標と英語学力テストの得点との相関はほとんどなく有意でなかったことを考えると、学力の低い学生の作文を分析する場合、作文の流暢度を示すこの2つの指標を用いて総合的英語力を測るのは妥当でないことが明らかになった。また下位群では各指標と CELT 得点の相関はすべて低く .4以下であった。さらに下位群のなかで下位20名、下位30名(全体の約25%)の相関を調べたのが、表4である。「T-unitの平均の長さ」を除いて、すべて相関は低いかほとんどなく、有意でなかった。

Gaies (1980) は T-unit 分析の限界として、英語力が比較的低い被験者のデータの分析には T-unit 分析は適切ではないようである (p. 57), と指摘している。低学力者は文法的には語彙的にも誤りが非常に多いので、T-unit の区切り方に影響を与えてしまう (Larsen- Freeman & Strom, 1977) からである。つまり、T-unit 分析は言語発達の、ある能力レベル以上の場合しか役に立たないようである (p. 58) と指摘しており、本研究の結果は Gaies の指摘を支持するものであった。T-unit 分析では一般に英語力の分布が広い被験者集団が必要となろう。

3.2 作文経験の違い

表5で非英語専攻者と英語専攻者を比較すると、非英語専攻者では .4以上の有意な相関を示したのは4つの指標であったが、英語専攻者では7つの指標であった。しかし各指標と CELT 得点の相関はいずれの指標の場合でも両グループ間で有意な差が認められなかった。作文経験や英語学習経験が非英語専攻者よりはるかに多い英語専攻者の方が、各指標と CELT 得点の相関が高いのではないかと予想したが、本研究ではこの予想に反して客観的指標の妥当性は作文経験の影響を受けなかった。この理由としては、全体的に作文時間が少し足りないと感じた学生が少なくなかったこと、大半の英語専攻者が大学での英作文の授業受講暦2年に満たないこと、さらにテストとして課した作文の難易度の問題が挙げられよう。時間的余裕のない30分間では英語専攻者でも argument タイプの英作文を書くのは容易でなかったようである(事後アンケートから多くの学生がもう少し作文時間を必要としたことが伺える)。今後は、大学での英語専攻暦3年以上の学生も多数参加させ、制限時間も検討し、description のような比較的書きやすい談話のタイプを課して、大学入学以降の作文経験の多少が指標の妥当性に影響を及ぼすかどうかを調べることが必要である。

3.3 客観的指標と文法力、語彙力の相関

表6は、文法テスト、語彙テストの平均得点と SD を示す。客観的指標と文法力、客観的指標と語彙力の相関の間に有意な差は検出できなかった(表7)。誤りを考慮した EFT の場合、語彙力より文法力と関係があるのではないかと予想したが、語彙力との相関と文法力との相関の間には有意差は検出できなかった。つまり、文法力との相関の方が語彙力との相関より有意に高いとは言えなかった。

このように客観的指標の有効性が幾つかの要因——談話のタイプ(ただし「英作文の総語数」「T-unitの平均の長さ」を除く)、読み手の指定の有無、日本語の干渉、作文経験——によって影響を受けないことがわかった。言語発達の指標の有効性がいろいろな要因の影響を受けないということは、最も有効な指標としての重要な条件の一つであって、歓迎されるべきである。今後も研究を重ねていかなければならない。

表5 客観的指標と CELT の相関と、相関の有意差検定 (非英語, 英語専攻者)

客観的指標	(a)非英語専攻者	(b)英語専攻者	(a)と(b)の相関の 有意差検定 CR
英作文の総語数	.368**	.569***	-1.384
T-unit の総数	.053	.272	-1.198
T-unit の平均の長さ (平均語数)	.564***	.546***	.143
節の平均の長さ (平均語数)	.287*	.442**	-.949
T-unit 内の節の平均数	.361**	.186	1.008
従属節の割合	.386***	.201	1.077
EFT 内の総語数	.578***	.630***	-.424
EFT の総数	.520***	.553***	-.255
EFT の平均の長さ (平均語数)	.374**	.408**	-.214
全 T-unit 内の EFT の割合	.532***	.483***	.339

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表6 文法テスト, 語彙テストの平均得点と標準偏差

level	n	文法テスト		語彙テスト	
		Mean	SD	Mean	SD
全体	121	69.55	11.12	48.65	12.87
下位群	62	61.90	8.31	39.66	8.79
上位群	59	77.58	7.44	58.09	9.18
非英語専攻者	69	67.46	11.69	43.64	11.53
英語専攻者	52	72.31	9.65	55.29	11.46

表7 客観的指標と文法, 語彙の相関と、相関の有意差検定 (全体)

客観的指標	(a)文法	(b)語彙	(a)と(b)の相関の 有意差検定 CR
英作文の総語数	.429***	.478***	-.476
T-unit の総数	.228*	.204*	.192
T-unit の平均の長さ (平均語数)	.416***	.509***	-.914
節の平均の長さ (平均語数)	.264**	.285**	-.169
T-unit 内の節の平均数	.203*	.318***	-.952
従属節の割合	.239**	.330***	-.760
EFT 内の総語数	.628***	.528***	1.160
EFT の総数	.588***	.483***	1.137
EFT の平均の長さ (平均語数)	.411***	.334***	.691
全 T-unit 内の EFT の割合	.581***	.462***	1.267

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

4. おわりに

本研究では、T-unit や EFL 等を用いた客観的指標で日本人 EFL 大学生の英語力を知る場合、総合的英語力の指標の有効性（妥当性）が学力レベルや大学での作文経験の多少によって差が生じるかどうかを明らかにした。さらに客観的指標が文法力、語彙力のいずれの能力と相関が高いかも検証した。主な結果は次の通りである。①「英作文の総語数」と「T-unit の総数」のような流暢度を示す2つの指標に関しては下位群より上位群のほうが総合的英語学力の妥当性のある指標となった。低学力の日本人 EFL 大学生のみに英作文を書かせる場合、「英作文の総語数」や T-unit に関連した客観的指標（ただし「T-unit の平均の長さ」を除く）は、総合的英語学力の妥当性のある指標とはなりにくいようである。T-unit 分析では学力に幅のある学習者集団が対象となることが必要であろう。②英語専攻者と非英語専攻者の間では客観的指標の妥当性に有意な差はみられなかった。すなわち客観的指標は作文経験の影響を受けなかった。③客観的指標と文法力との相関と、客観的指標と語彙力との相関の間には有意差が検出されなかった。

今後も実験を積み重ねていく必要がある。今後の検討課題として、本研究と同じ研究目的で、argument 以外の他の談話のタイプをとりあげて分析すること、客観的指標の有効性と作文時間、作文の内容、構成との関係も検討すべきであろう。

注

- 1) Hunt (1970: 4) の定義によれば、T-unit (minimal terminable unit) は、一つの主節を含み、その主節に付加される従属節、及び、主節の中に埋め込まれたり、主節に付加される非節構造をも含んだ言語単位である。
- 2) 実験の機械を与えてくださった、新潟大学、県立新潟女子短期大学、信州大学の先生方には心より感謝申しあげる。
- 3) Harris, D. and L. A. Palmer. (1986). *CELT-A comprehensive English language test for learners of English: Form A*. New York: McGraw Hill Book Company.
- 4) 被験者全体における各テストの信頼性係数(KR-21)は文法 .781, 語彙 .780, リスニング .540であった（この場合素点使用）。
- 5) 特に Ms. Leslie Robertson, Mr. Fred Durbin には厚く謝意を表する次第である。

参 考 文 献

- Crowhurst, M. (1980). Syntactic complexity in narration and argument at three grade levels. *Canadian Journal of Education*, 5(1), 6-13.
- Crowhurst, M. and Piche, G. (1979). Audience and mode of discourse effects on syntactic complexity in writing at two levels. *Research in the Teaching of English*, 13(2), 101-109.
- Dvorak, T. (1987). Is written FL like oral FL? In B. VanPatten et al. (Eds.), *Foreign*

- language learning* (pp. 79-91). New York : Newbury House.
- Gaies, S. (1980). T-unit analysis in second-language research : applications, problems, and limitations. *TESOL Quarterly*, 14(1), 53-60.
- Harrington, M. (1986). The T-unit as a measure of JSL oral proficiency. *Bulletin of the ICU Summer Institute in Linguistics*, 19, 49-56.
- Harris, D. and L. Palmer. (1986). *CELT-A comprehensive English language test for learners of English: Form A*. New York : McGraw Hill Book Company.
- 林日出夫(1979)。「外国語習得における話す力と書く力のバランスについて」『語法研究と英語教育』山口書店, 第2号, 52-65.
- Hill, L. A. (1960). *Picture composition book*. London : Longman.
- Hirano, K. (1989). Research on T-unit measures in ESL. *Bulletin of Joetsu University of Education*, 8(sect 2), 67-77.
- 平野絹枝(1990)。「言語能力の客観的指標の妥当性——日本人 EFL 大学生の場合——」上越教育大学研究紀要, 第9巻(第2分冊), 65-77.
- Hirano, K. (1991a). The effect of mode of discourse on objective measures of EFL proficiency in Japanese university students. *JACET Bulletin*, 22, 15-34.
- Hirano, K. (1991b). The effect of audience on the efficacy of objective measures of EFL proficiency in Japanese university students. *ARELE*, 2, 21-30.
- 平野絹枝(1992)。「誤りのない T-unit の有効性に関する一考察——日本人 EFL 大学生の総合的英語力の測定において——」上越教育大学研究紀要, 第11巻 第2号, 211-222.
- 平野絹枝(1993)。「日本人 EFL 大学生における総合的英語力の客観的指標の有効性——日本語の介入の影響について——」教科教育学研究第11集, 199-211.
- Hunt, K. (1965). *Grammatical structures written at three grade levels*. NCTE Research Report, No. 3. Urbana, IL : The National Council of Teachers of English.
- Hunt, K. (1970). Syntactic maturity in schoolchildren and adults. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 35, serial No. 134, 1-67.
- 門田修平(1990)。「作文評価における客観的指標の妥当性」『英語・英文学新潮』ニューカレント・インターナショナル, 339-350.
- Khered, M. (1983). *Measuring the syntactic maturity in the written English of Arab students at four proficiency levels and establishing EFL index of development*. Unpublished doctoral dissertation, University of Kansas.
- Larsen-Freeman, D. (1978). An ESL index of development. *TESOL Quarterly*, 12(4), 439-447.
- Larsen-Freeman, D. (1983). Assessing global second language proficiency. In H. W. Seliger and M. Long (Eds), *Classroom-oriented research in second language acquisition* (pp. 287-304). Rowley, MA : Newbury House.
- Larsen-Freeman, D. and Strom, V. (1977). The construction of a second language acquisition index of development. *Language Learning*, 27(1), 123-134.
- 中村博生(1991)。「中学生の意思伝達を重視した書くことの評価方法の開発」*STEP Bulletin*, 3, 14-28.
- Perkins, K. (1980). Using objective methods of attained writing proficiency to discriminate among holistic evaluations. *TESOL Quarterly*, 14(1), 61-69.

- Perron, J. (1977). *Written syntactic complexity and the mode of discourse*. Eric document No. ED 139 009.
- Scott, M. and G. Tucker. (1974). Error analysis and English-language strategies of Arab students. *Language Learning*, 24(1), 69-97.
- 富田祐一 (1990). 「T-unit を用いた高校生 の自由英作文能力の測定——総合的英語能力との関連」 *STEP Bulletin*, 2, 14-28.
- Vann, R. (1979). Oral and written syntactic relationships in second language learning. In C. Yorio et al. (Eds.), *On TESOL '79* (pp. 322-329). Washington, DC: TESOL.

The Validity of Objective Measures of the Overall English Language Proficiency of Japanese University Students : Proficiency Level, Writing Experience, Grammar, and Vocabulary

Kinue HIRANO*

ABSTRACT

This paper examines whether differences in proficiency level and writing experience have significant effects on the validity of objective measures of the overall English language proficiency of Japanese university students in an attempt to find an appropriate EFL index of development. It also investigates the correlations between objective measures and grammar scores, and between objective measures and vocabulary scores. Findings indicate that differences in language proficiency level had significant effects on the validity of the total number of words per composition and the total number of T-units. That is, these two measures were found to be more valid indices in the high group than in the low group. Objective measures do not appear to be useful for the analysis of subjects with relatively low proficiency. Writing experience did not significantly affect the validity of objective measures. There were no significant differences in the correlations between objective measures and grammar scores, and those between objective measures and vocabulary scores.

* Division of Languages : Department of Foreign Languages